

湯

川

記

湯

川

附

記

湯書簡
川氏系
図通

湯川記

湯川先祖之事

熊野湯川之先祖を尋ぬるに甲斐源氏武田三郎と云人。弓箭之道に達し名高人にて有ける。或人の纒言によりて蒙勅勘熊野湯川と云所に遠流せられて年月おくり給ひしが、其頃熊野に賊徒有之近辺を押領熊野参詣貴賤をなやまし民のわずらひとなりしかば討手下向しけれども、山林にかくれ居てたやすく攻ほろぼしがたき所に、武田三郎武畧長じぬる人にて、小勢を以てかの賊徒をことごとく退治、張本をからめ取帝都へ引きまいらせけるによりて、ゑいかん有勅勘をゆるされ牟婁一郡ヲ賜り芳養の内泊城か梅といふ所に居住し給ひけり。其子孫代々牟婁郡を相続しけり。湯川弥太郎と申たるは、後醍醐天皇の御宇ニ而天下大キニみだれ宮方武將新田左中將・楠判官正成、武家の大將尊氏と合戦止時なし。紀伊国八庄司湯川・玉置・山本・恩地・牲川・貴志・荒川・湯浅・田辺別當其外世に名ある士は皆宮方に属して勤皇の戦をいたす処に、弥太郎如何おもはれけん尊氏に属し度々武功有之により、尊氏の世となりて有田・日高・牟婁三郡の内賜り、紀州のはた頭として小松原に在城して代々足利公方につかへ給ふ。

湯川民部少輔直光教興寺にて討死之事

永禄三年湯川十二代民部少輔直光之代ニ當り、畠山高国ノ子息右京太夫高政と云人有。河内・和泉・紀伊三ヶ国の守護職にて、河内国高屋に在城し給ひける。湯川・玉置は出仕を公方に上致高政の旗下也。其外の士は熊野武士湯川幕下にて高政へ出仕したりける。其頃三好修理太夫は叛逆により高政當国へ下向し給ひて、湯川をた

のまれければ根来寺の衆とともににはせ参りけるにより、三国河内・和泉・紀伊の勢を催し数千の軍勢をひきひて、泉州久米田におしよせ三好実休を打捕り、これより三好修理太夫がたてこもりし飯盛の城を二重三重に取巻きて、卯月五日より五月十日迄手痛く攻けれども名城にて要害堅固なれば、攻めあぐみて見えける処に剩へ三好の舍弟撰津守、大阪天王寺表へ中入し戦ひければ、かなはじとやおもはれけん高政高屋へひきとられける。直光も飯盛より教興寺へ打出是も同く高屋へ入らんとし給ひけれども撰津守にへだてられ、今は叶はぬ所ぞと見定郎徒にむかひてけふこそ我等が最後なれ、敵にうしろを見すべからず、撰津守を討とれぞ下知せられける。目良次郎湛清・同五郎湛経兄弟はくつきょうの強弓引きの手き、にて、さしつめひきつめさんざんに討たるに、矢庭に十六七騎射て落し矢種つきぬれば、大勢の中へ馳け入て能敵あまた打取り打死をぞしたりける。直光これを見給ひてす、めや者どもとて眞先にかけて入給へば、其手の兵共大將をうたせじと我先くにと大勢わって入り乱れ合ふてぞ戦ひける。おめきさけぶこゑ敵味方の鉄砲の音ニハ大山もくづれ、太刀長刀のひらめく影は電光のごとく敵を七八度が程迫まくり、しばらく息をつきたまひて三好が首を見ざりつるこそ遺恨なれ。扱たれぐうたれたるぞと見渡すに頼み切つたる一族郎徒過半うたれければ、今は命生きて何かせんとして又敵の中へわって入り切死にぞし給ひける。湯川家にては直光を初として同弟湯川帯刀、是は九之助親也、湯川右工門太夫兄弟・同甚太夫・湊上野・同記助郎徒ともに七十人。国衆には目良兄弟・山際十三郎・神保・安宅新助父子・貴志・白樫・富田・飯沼九郎右衛門・龍神刑部・その外かれこれ五十余人、根来寺人数二百余うたれける。三好方にも勝軍はしたれども一族郎等名ある者多く討れける。高政今は力なく目良左京引具して高屋城をのがれける。

秀吉公湯川・山本退治合戦之事

天正十三年秀吉公・大和大納言秀長卿・羽柴中納言秀次卿総軍十萬騎ヲ紀伊国退治として被向ける。三月廿四日先根来寺ヲ攻おとし同日太田の城を取巻て三方につゝみをつき吉野川をせきかけ水攻にぞし給ひける。熊野は仙石權兵衛・尾藤久右衛門尉海陸より乱レ入、湯川兵部少輔直治ハ代々三郡有田・日高・牟婁を領し小松原にて居城有しが、秀吉公より討手向ふ由聞へしば門々一族郎徒を集討手ヲ引受合戦をやいたす・秀吉公へや志たがふと衆口まち／＼なりかゝる所に根来・太田も攻落され、熊野へよすると云ければ、皆々小松原之城へはせ集りける人々には湯淺權守・宮崎右馬之丞・下芳養伊豆守式部太夫・林入道榮仁・神保・高垣・湊・白樫・津村・龍神・脇田・岩代・山地・寒川・目良・愛須・万呂・横矢・眞砂・安宅・周参見・小山・高瓦・玉置壱人も不殘群集りたり。直春対面有之軍評定とり／＼成り、湯川安藝守は直春をいさめて申されけるは小を以大に適せずと古き文にも見えたり。其上秀吉は天下を合するいきほひなれば中々終始運を開かん事かたかるべし。曰比中をくとも秀吉公へ随ひ給ふべしさあらんに於いては、ながく湯川之家たゆべがらず。是家を全ふるはかりごと成べし、方々はいかゞ思ひ給ふとのたまへば、直春申しけるは當家は武田源氏の末流として當国に住すること我等に至てすでに十三代、末武勇の名をおとさず一戦をとげずしておめ／＼降参せん事末代の恥辱、中々おもひもよらず先祖の名をけがすに似たり。此項も申すごとく海上ニハ兵船を出し、陸にはふじ白・かぶらざか・志、がせ切取て人数を指つかはし、山林には伏兵を置いて敵攻め来らばあり所を志らせず引籠り、思ひもよらぬ所よりかけ出／＼案内しらぬ上方勢をおもふまゝにかけなやまし、一兩年も攻戦其上にては天運にまかすべしとおもふはいかにとのたまひければ、いづれも此議にぞ同じけるさあらばいそぎ雑賀表へ出張すべしと海陸に手分けを致所に、はや有田・雑賀の辺は敵野山にみち

くたるよ志。あはたゞしく申來るげにも陸ハ藤白の坂、海は比井・三穂の沖寄手雲霞の如くぞ見へし。直春此程の長せんぎに敵に難所をとられ如何すべきといらち給ひけれど甲斐ぞなき。安藝守申しけるはかゝる大軍を引き受け何の手だてもなく此城にてかかわるべきにあらず、まづ熊野の奥へ引籠難所に待ちて戦ふべしはやくとす、めけれ。直春も力なくさらば城に火をかけよとて、かすみともにもやきあげたり。老ひたる人々・妻子・おさなきを皆山林にかくしける。若者も取あへず急ぎおちられける。相したがふ士には湯川安藝守湯川直春の伯父や、同兵部大輔・上野城主・同式部太輔教春・泊城主同治部少輔春信・平井掃部春頼・嶋右馬充弘春・脇田六郎右衛門俊秀・同藤六俊勝・津村式部丞信秀・岩代右衛門太夫・同一族・吉田外記・林源右衛門入道春當・栗山三郎次郎・玉井新兵衛尉其勢二百余人。三月下旬に小松原を打立其夜芳養泊の城に着給ふ。敵跡より寄來由聞へければ志の、めもあけゆくころ龍神山にわけ入志のび給ひける。其日も暮夜に入れればよろひの袖をかたしきて其夜は山にあかし給ふ。直春は脇田六郎右工門を近付かゝる落人の身と成りてたとへていふべきにはあらね共、むかし鎌倉殿石橋山合戦の時打ちまけ枚山のふしきにかくれ給へども運つきざれば遂に天下を治給ふ。我々は天にせぐ、まり地にぬき足し身をよすべき所もなし。又運を開かん事有べからず口惜しき事かな。藤白坂のあたりへ出張し手痛き合戦を致しかなはずば小松原ノ城を枕としてとにも角にも成可身のながせんぎに日数をつくし、今ほぞをかむに益なしとの給へば脇田氏此由取抑尤もさりながら何をのたませたもうべき。但人は名こそおしう候へ、先何方へも落行かん、所々敵を待受け命かぎりニ戦イ天運に任せらるべしと申しければ、さらばなんぢ近露六郎方へ参頼べしとのたまへば尤しかるべしとて、其夜いそぎはしり行六郎にかくと申しければいかでか此節見離し申べし。日頃の御恩には命を可奉とてたのもしく家ノ子郎等引ぐしてむかひに参れば、脇田ハ先にかけぬけて龍神山に参りふた心なき由申しければ、直春大いに感悦し給ふ。やがて横屋六郎が館に入給ひ人数集め、弓鉄砲をそろへ用心きびしく見へたり。目良淡路守は流石

堪増の末葉として、こゝやかしこにうたれなれば人のあざけりも有べしとて、手勢ばかりにて秋津川中峯城に引籠り、敵寄ば一戦して上方勢に手柄の程をあらはし、腹かき切名を後代にとゞめてこそと思定ひかへける。いさゝかもあわてたる気色はなかりけり。寄手大將には仙石權兵衛・尾藤久右衛門・藤堂専右衛門・蜂須賀彦右工門・宇野若狭守・青木堪兵衛・杵若越後守其勢三千余騎。牟婁郡田辺に押寄神社佛閣に至迄一宇も不残焼払ひあさましかりける次第也。老いたるも・若きも足にまかせ山林に逃げかくる、只狩場の鹿にことならず。他国はみだるゝといへ共熊野の内はしづかにて、合戦と云事音にのみ聞きしに今かゝるみだれ出来ければ、くもの子をちらすごとくに子は親を尋、親は子を尋貴賤山野ににげまよふ目もあてられぬありさま也。秀吉公天下を取給ふに多くの人を殺し、ことに佛神をうやまいたまわず靈神靈佛を焼払あさましかりし次第也。先山本をふみつぶせと一ノ瀬へは越後、守を大將にて長片山之内河下より攻のぼり三宝寺前の川原に陣を取る。そもく、此城と申は龍松山をうしろに當て、北は峨々たるいはほそぼだち、三方は沼にて麓は竹藪生じたり、前ニハ河流れける、拾丁ばかり出張川のこなたにひかへたる。山本權之丞・同内匠・井潤清助三人乗まはし鉄砲をうたせける。寄手の方にも足輕を出し鉄砲を打かけける。かゝる所に青成馬に乗りたる武者・足輕に下知し鉄砲を打たせたる所を廣畑福左衛門矢取って打ちかへはざる計り引しぼりひようとはなしけるが、むないたをうちぬかれ馬より下にどうと落。三栖市之丞も芦毛成馬に乗、卯の花おどしの鎧きたる武者一騎討落、敵是に腹を立川をわたさんとしたりけるが、水の深さを志らざりけん少猶豫してひかへたる所に、熊代左近川端に立寄申様、此川さしも大川と申にはあらねども山奥に雨やふりけん、よその谷川の水落ちてみなぎる水きしを浸したり、朝夕わたる川なれば案内しらぬ人は有まじ。されど其瀨ふみ致さんとて黒き馬に乗緋おどしのよろひきて先に立てぞわたりける。其の時実掃部・鈴木刑部・糸川常右衛門・笠松甚助・其外のさむらひ我おとらじと一度にどつと打入むかふのきしにかけあがり、熊代左近申様山本は存ずるむねあれば、秀吉公

は不随たとひ此戦に勝たりとも運を開かんとおもはず、命は義によつて軽しはな
くしく軍して名を残すと思ふばかりなり。われと思はん者は組て熊野武士の手が
らの程をみたまへとて、敵の中へぞかけ入ける。寄手の方の井尻三太夫と名乗し
し戦ひしが、太刀を捨て組合ちつともはたしうせず鞍の前輪に引寄せ首かき切高々
差上、此時節ニハ首を何かはせんとして敵の方へなげやりける。寄手是をみて一騎も
残らず打ちとらんとて追つかへつ戦ける。今生にて又いつの世にあふべきぞ、たゞ
切死にせよとて一足も引かざりける。山本一騎當千と頼つる眞砂次郎七郎・田上五
郎太夫も深入りして討れける。寄手の方も服部市兵衛・田上右京にぞ討れける。桐
の孫作は大勢の中へかけ入武人切ふせて、五人手をおふせいきほひかゝつて居たり
ける、深見又五郎と槍を合つき合しが河端にて孫作又太郎に討たれける。上方勢い
やがうへにせめかさなり、おめきさけんで攻めにける。味方は川を後に置ければ一
足も引べき様はなし。死くるひに切あふたる足輕・百姓方々よりあとをさへぎり雨
のふるごとく弓鉄砲を打掛ければ、思も空のかなたより敵多く出たるをみてかなは
じとやおもひけん。味方の手負をもたすけず越後ノ守は三宝寺へ引取、朝来村大内
谷へ陣ぞ取たりける。上方勢手負・死人多かりけり。四月朔日近露村へは仙石權兵
衛・尾藤久右衛門尉・藤堂輿右衛門尉千五百騎にてむかひける。湯川は塩見峠ニ出
張弓鉄砲ヲ揃待かけたり。敵是を見て云けるがいなく、小松原間にげてしたる湯川
いづくにかくれおるとも何程の事かあらん。けちらせとててゑいやとこゑを出して
のぼる所をちかくと矢ころに引受け、田畑六太夫・脇田六郎・小切間左近・林兵
庫が左より討おろしければ、あだ矢は一つもなかりけり。足輕・百姓は木の下、岩
の蔭よりも横合に弓・鉄砲をはなしかけければ、はせ合追ひちらさんとするに一騎
打の細道、或は谷をへだてたればかけちらす事も不叶、只まことに成てうたれける
を、山になれたる者どもにて爰やかしこにはせちつて思ふ様にぞはたらきける。敵
しどろに成て引色に見えたる所、直春の郎徒嶋右馬丞・玉井新兵衛・平井掃部・加
藤大藏・津村・高垣一度にどつと坂を下りに追おろしければ、上方勢多く討たれて

ふもとを差してにげたりける。扱こそ直春も小松原のはじをすゝがれける。此合戦に敵方に名有士は多くうたれける。味方にも田中小平太但馬など一騎當千と頼者共多クうたれける。扱其後敵は田辺に一所に集り居、此程のまけ軍こそ卒爾にかゝる事もなく、少々人数を出し小勢行合フ計にてはなぐ敷合戦はなかりけり。今度は大軍を以先山本退治すべし、又近露をば山林に火をかけ焼打にやする。また案内者を遣し敵の在所を見定山々を取切、城内に追込てや討と評議とりぐなりける。山本も此こにては始終叶ハじとや思はれけん。下川へこそひかれける寄手是を聞き跡をしたうて追かけた。たとへ虎伏野辺迄も追つめ討取一ノ瀬の恥を雪げとぞもうしける。山本はかぢや川をわたり、のぞきの橋を引はづし待ちかけた。山本平助・熊代・深見など小野沢の木かくれより、鉄砲をきびしく打ちかければ大勢討たれる計りにては、かゆくべきとも見えざりければ、敵に道をさへぎらるゝなどてし出したることなく田辺へぞ討かへす。寄手たまぐ大軍なれども案内を不知。味方小勢なれども心をひとつにして、しかも難所に待ち受けてかけ引き心にまかせたれば、戦毎に勝たずと云ふことなし。山林にはせちつて敵に在所を知られず、或は夜打ちし、兵糧を奪ひ陣屋に火をかけさまぐ寄手をなやましけれ。三月下旬より七月中旬まで様々手たてをかへて攻めたれども、さして仕出したる事もなかりける。湯川は代々熊野を領し、秀吉公天下をあハするいきおひの其鋒先をくぢき、わづかに熊野の内にて秀吉公へ敵対立ける事一族郎徒ニ心なき爲なり。其後之仰にて和睦にこそ成にける也。

湯川・山本殺害之事

天正十四年二月本知安堵可有由にて、直春大和国郡山にて数日ヲおくり給ひしが、同年七月に毒害せられ給ひけり。山本主膳佑ハ城を圖書にあづけ置、玉置主殿・田

△重

一本金トセリ粉[?]

上吉之丞・同勘太夫・同久市郎・同本太夫・深見又太郎・同右衛門・原四郎右衛門
・森福太夫・堀重右衛門・笠松樫太夫・玉置藤十郎・△たて、藤堂佐渡守居城川上
出しより、かく有べきとはおもひもうけていたりしぞかし。敵は何十人もあれおも
ふかたきは吾人也。佐渡守を打取らんと奥さして切つて入り、兼ねて用意し事なれ
ば、大勢懸出中に取こめ討たんとす。思ひ切りたる兵もの共なれば、散々に切合ひ
半時計り戦ひ、三拾四五人切りふせ大勢に手ヲ負ふせ、遂に討たれて名を後の世に
とゞめける。中にも左近丞・田上吉之丞は死する迄も、人手にかゝるまじきとや思
ひけん。大勢を切り拂ひ高所にかけてあがりさしちがへてぞ死にける。右京はそこを
切りぬけて落て行、深見又太郎は高野山に落不動坂にてうたれける。

泊之城攻事

右京は夜を日についで熊野に立ち皈り、郡山にて直春生害の事、山本粉川にて討た
れ給ひしこと、又朋輩討死にの様子くわしく語、我々もとも角にも成す可き身の
云ひがひなく、立皈りかたぐに面を向る事本意にはあらねども、御後の事も心も
となくて、我身のはぢをかへりみずかくと知らせ申さんと、其爲難口命ながらへて
二度懸ニ御目一事口惜次第とてなみだをながし申しける。是を聞く人々角あるべしと
するならばおもふ程戦、和睦をも不要討死をとぐべきにて、敵の謀に陥りやみく
とうたせし事、我ながら不覺なりとくやみけれども甲斐なし。右京は今思ひ残す
事なし、腹をきらんとしたりしを栗山三郎おしとゞめ、其方計り主君持たる身にて
もあるまじ、とても死ぬる命いざ泊に押寄越後守に腹切せ主の×きやうやうを報じ
奉らんと評定相究、七月朔日山本判官大手の大将として、其勢貳百餘騎泊の城に寄
せかけたなり。城中へも敵にすると聞へしかば上を下へかへしける。其折柄原右京・
根来寺智明院ねごろを落て後爰やかしこに漂白しつながらぬ舟のこゝちにて、誰を

×一本

芳養とあり

×一本コノ

宇ナシ

可頼島もなくていたりしが、湯治の人にまぎれつゝ瀬戸に遊びて日をすごしたるが、越後守にいさゝかしたしむ用有之泊城にぞ入りける。此頃のうかりし事などかたりなぐさみ、越後守なさけ有ていたわりければ日数を送りし所、又かゝることこそ出来れりよつて、是も侍の望む所なれ一方をふせぎ可申とて、ものの具取てかたにかけ太刀おつ取人数を引ぐし、城より北の方三町計りへだてたりし高山によじのぼり之にて敵を待受け、いかにかたぐたへいかなる子細あればとて、かく一揆をむすび越後守に向給事たうらうが斧成べし、甲をぬぎ弓づるをはづし降参し給へ。我々能はからひ命をばたすくべしとぞ申しける。湯川五郎馬乗出し右京にむかひて云ひけるは、互に弓箭を取付なば是非もなし。湯川・山本程の大將をいつはりたばかり討事ある。君憂うるときは臣はづかしめられ、君はづかしめらるゝときは臣死すといゑり。我々命生きて何かせん、越後事を討取此のうらみをさんづべし。命は主のために奉もかばねは芳養の浜にさらすべしと、眞先かけて切てかゝる。かねて案内は知つたり、山本權之丞・鈴木刑部・脇田六郎・糸川官右衛門・榎本治郎おとらじと攻のぼりける。其義ならば一騎も不残討取とて弓・鉄砲を討合ひ、矢だねつきぬれば散々に切合たり。越後守此の由を見て智明院討たすな、原うたすなと城内よりも打出たり。栗山三郎次郎は右京と槍を合々つきあひしが、栗山つきふせられて討たれけり。笠松甚助岩をつたひて後へまはり、やがて右京を討取けり。右京かくれなき剛の者なりしがつひに爰にて討たれける。智明院をば龍神三郎太夫ぞ討ちける。寄手はおもひ切りたる兵者どもなれば、命芥よりも軽しうたるれども物ともせず、おつ立てく攻めければ、越後守城門へ引込て木戸をとぢてぞふせぎける。寄手城を取巻て鉄砲打かけ、今宵の内に攻落さんともみにもんで責めにける。日も暮れかたに、にわかにかきくもり雷おびたぐしくなりわたり、風雨はげしく吹出、海つらあれ白浪山のごとくにて、岩をくだき震動敵も味方もおぢおのゝき、心はやたけに思へども雨ふせくに便なく天のはるゝを待つべしとて、寄手かこみをときてぞのきにける。是といふも搦手の大將龍神が遅参故、日の内に攻落すべきも

のを相圖を相違し手のびにしける事こそむねんなれとて、つぶやきけれ共かひぞなき。越後守は涸魚の雨を得たる心地して人数を集め、弥々用心きびしく見へにける。其後はなすべき力もなく湯川・山本の土とも皆ちりくりに成りにけり。

一、右に記す者湯川先祖武田三郎と有。一説には武田の次男筋にて武田次郎兵有次郎と有者。右之通熊野湯川に有所に岩上峠ニ鬼神住而往来をなやますを、武田次郎武畧にて家来平井掃部主從二人にて彼鬼神を討取有。其外ハ右記方通大形相違無之者也。

本書はもと南部町岡崎氏所藏のものにて、天保三年辰卯月朔日の筆寫にかゝるものなれど、又寫しなることいふまでもなし。脱字・誤字等多く『湯川実記』に対照して訂正・注記せり。今東内原村森彦太郎氏の所藏にかゝる。

昭和十五年八月十六日 森氏よりかりて寫之

芝 口 常 楠

御所口上覺

此書八天正十五年辰三月千里浦古記ノ事ニヨリテ
日高藤井塩路和吉方へ尋問ニヲヨビ記來リナリン

一、當村要害山と申所に往吉印南在ニ井山口を領し候由、湯川左衛門太夫と申古城跡御座候。地はゞ二反余只今に而は不残下畑之御年具地にて則御檢地御帳とも字城山と御座候。右畑之傍に湯川家の石碑と申て五輪之高サ四尺計臺座一尺三四寸許四面並ニ兩脇に高三尺計と貳尺計之同五輪石塔都合三ツ御座候。法名俗名とも御座無。五輪の四方に梵字壺字ツツ計御座候。然共只申傳へ計にて旧書等も無御座候。同所石山下筋を城下・城之越・射場等と申唱候。依而御調べに付書附差上申候。宜シク被仰上可被下候。

印南中村庄屋

喜助

同所 肝煎

林右衛門

午九月

酒井次郎殿

×
ココ
円哉現公トヨム
ヨウナリ

天 心 道 誠○

天 源○ 宗 泉 居 士
天 章 慶 祐 居 士

円 哉 現 公 居 士 ×
光 岸 淨 照 居 士

同 名 ニ ツ ア リ イ カ ム

玉 峯

湯 白 源 清 居 士
岱 宗 威 康 屋 居 士

一 河 宗 純 居 士
印 覺 雲 證 居 士

□ □

祖 印 宗 源

大 用 天 譽 居 士 ○
光 岸 淨 照 居 士

一 光 道 味 居 士
祥 岩 宗 吉 居 士

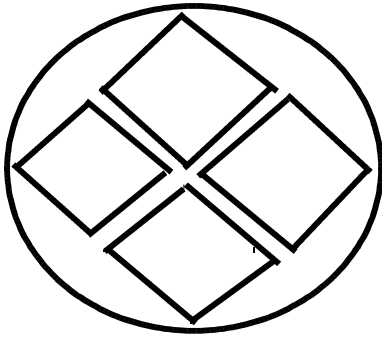
□

○ 印ハ別紙ト違シ可尋 同名ノモノト口印ハ直春ヨリ以下ノ戒名ナルベシ
道味ハ十五代目丸太夫ト左ニアリ勝三郎ノコトカ考フルベシ

今『日高郡誌』ニヨリテ湯川家ノ戒名ヲ見ルニ

- 1 玉峯光秀
- 2 天行道誠
- 3 祖印宗源
- 4 天源宗泉
- 5 天章慶祐
- 6 湯白源清
- 7 天用源譽
- 8 用哉親公
- 9 一河宗純
- 10 岱宗建康
- 11 祥岩宗吉
- 12 光岸淨照

(細字 芝口シルス)



紀州日高郡小松原丸山城主

湯川十五代之法名

十五代目道味 俗名九太夫孫

湯川弥治兵衛尉

源政春

外三系圖有

右之通位牌之表裏に朱塗を以記御座候。然共系圖取持無御座候。其外一向書物相無之委細相知不申候。位牌之高壹尺三寸位縁蓮花元ハ金薄と相見惣位牌ハ黒塗ニ御座候

右之通當村藤吉と申者仏壇ニ所持仕御座候付寫取指上申候門宜敷被仰上可候

以上

文化七年

午九月

印南中村庄屋

吾助

同所 肝煎

林右衛門

酒井治助殿

右書簡ニ通ハ文化七年のものにして、天保十四年南部千里浦左記之事ニ就テノ問合せ
に對し此古書狀をうつし提出し來れるか、或は此古書狀と問合わしたるか。(芝口)

湯川之系圖

元祖玉峯

甲斐源氏末葉武田之次男也。蒙勅勘配流于熊野湯川於岩上峠討鬼神爲恩賞賜牟婁一郡策策於芳養庄内梅六所家来平井掃部卜云者芳養之西野村ニ屋あり

二 天心道成

十四 湯川丹波守 天正十四年二月直春於大和国郡山毒害せらる
父直春と郡山に有しが直春死去後仕ヨ大和納言殿知

行七百石、文祿四年頃大納言殿及ニ御生害ニ丹波守住紀州
九度山。慶長十九年紀伊大守淺野但馬守殿より召出サル
知行七百石。有功大阪兩陣。天和五年但馬守藝州廣嶋へ
国替之事アリ

十五 湯川勝三郎 仕藝州廣嶋但馬守殿

右之内何レノ代ニ候哉。將軍と一緒に内裏へサンゲイ致候間、南
方副將軍の宣旨有之由申傳候

一、日高郡衣奈村下司上山源兵衛所に湯川政春より衣奈庄六ヶ村八幡宮社領証文有
日高茨木村六郎左衛門と申者之所に直春の感状二通あり。小松原薬師堂寺領之
證文有之由。此ハ無候

一、日高にて湯川・玉置と名乗候者皆両家ノ家来之由ニ候。湯川より以前の日高に
て百姓之内頭分にも成候ハ財部兵衛と申者有之候。此者は山口喜内一味、一揆
にて亡申候由。廣に津木成と申者有之候（得共）。是も喜内と一味の者取亡申
候。其外日高にて只今口聞申者湯川・玉置両家の家来、或ハ其後外より参候人
々にて有之候由に候

以上書簡二通及湯川系圖ハ湯川記ト同時にうつしたるものと覽候

昭和十五年八月十六日寫之畢

芝 口 常 楠

昭和廿四年九月十三日芝口氏藏書を借りて寫す

此ノ日又秋雨肅々たり

清 水 長 一 郎

父が写本した『湯川記』には昭和廿四年に、古書類の裏へペンで写したものと、さらにそれを原稿用紙にボールペンで書き写した者と二冊ある。昭和四十四年に写した分の後書きには

『湯川実記』と内容殆ど同一にして、これも又其の作者を明にせざれども、略々同じ頃の作と思わる。今回大阪在住の湯川敏治氏の依頼により之を寫す。
昭和四十四年三月十八日

清 水 長 一 郎

すでに『御坊市史』資料編に東京大学史料編纂所影写本が記載されている。内容は所々部分的に異なるが大筋で同じである。そして『御所口上覺』及び『湯川之系圖』が『御坊市史』資料編にはなかったため、敢えて写本活字化した。

平成十六（二〇〇四）年七月二十四日

清 水 章 博